

礼拝のしおり (2022年3月号)

～主の御前に一つにされて～

そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」

(ルカによる福音書 23 章 34 節)

主の聖名を讃美いたします。3月も半ばを迎えて、春らしい暖かさを感じる日が多くなってきました。新型コロナウイルスの第6波は、漸く徐々に波が収まりつつありますが、パンデミックそのものの終わりはまだ見えてこないのが現状のようです。

2月の下旬、ウクライナにおいて起こったことが、世界中に衝撃をもたらしました。それ以来、新型コロナウイルスのパンデミックがなお続いていても、あたかもその影が薄くなってしまったかのように、ウクライナを巡る深刻な状況が、世界全体に関わる問題として、日々私たちのもとに伝えられてきます。

このようなことが、一体何のために起こったのか。そして、一体何を目指して続けられているのか。歴史的なこと、世界情勢に関わること、その理由や今後の動向を、確かな形で語ることなど私にはできません。ただ、そこにどのような理由があるにせよ、聖書が示す私たち人間の罪の問題が露わになっていることを改めて深く覚えずにはおれません。

教会の伝統的な暦において、レント（受難節）の日々の中にあります。主イエス・キリストの十字架における御苦しみと死に思いを集めるべき時です。そのことの意味をまた考えずにはおれなくさせられます。

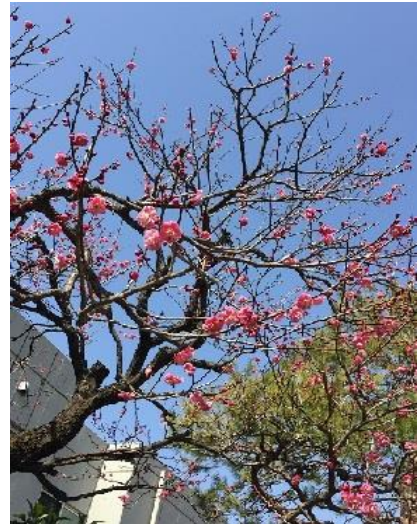
主イエス・キリストが、十字架の上で祈られた祈りが、今改めて心に迫ります。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」。十字架の上で、主イエスがひたすら思い、なさっておられたことは父なる神への祈りでした。ご自身を十字架につけ、ご自身をあざけり、侮蔑してやまない人々、さらにはただそこに立って見ていた民衆の一人ひとりをも含めて、ゴルゴタの丘に立つ人々を、神が赦してくださるように、赦しをお与えくださるように、ひたすらに執り成して祈られる祈りが、十字架の上で捧げられていたのです。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」。自分が何をしているのか知らない。それは、自分たちが十字架にかけて殺そうとしているイエス、その姿をあざけり、侮蔑の思いを向けているイエス。それが、神の独り子であられるということを誰も知りませんでした。

私たち人間は、長い長い歴史の中で一体何を学んだのでしょうか。何を知ったのでしょうか。大切なものを何も知らないでいる私たちがいるのかもしれない。私たちは日々何をなし、何を目指して歩み続けているのか。本当には知らないままに歩んでいる。それが私たち人間の姿かもしれません。しかし、それゆえに、あのゴルゴタの丘の上に立った十字架の上で祈られた主イエスの祈り、丘の上において、何も知らないでいたすべての人々のための祈りは、今この時にも届いている祈りであることを思います。主イエス・キリストが十字架の上で捧げられた祈りのもとにある世界であり、今この時を生きる私たち一人ひとりであることを思うのです。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」。あの時、主イエスが十字架の上で捧げてくださった祈りを、十字架の死とご復活の出来事を経て、天に昇られた主イエスが今も祈り続けてくださるに違いありません。聖書を通してそのことを知るならば、私たちは、知るべき大切な何かを知る者として生き始めているのだと思います。

どうか主が、この世界に御心を行ってくださいますように。



園庭では、白梅に続いて
紅梅が咲いています。

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
3月20日(日)	エゼキエル書 33章 10～16節 マタイによる福音書 25章 31～46節 「この最も小さい者の一人にしたのは」	詩編 6編	13, 299, 505, 28
3月27日(日)	詩編 86編 11～13節 マタイによる福音書 26章 1～13節 「惜しみなく愛を注いで」	詩編 32編	24, 311, 298, 29
4月3日(日)	ホセア書 11章 8～11節 マタイによる福音書 26章 14～25節 「裏切りに負けない愛」	詩編 38編	1, 306, 529, 26
4月10日(日) 棕櫚の主日	詩編 27編 7～10節 マタイによる福音書 26章 26～35節 「いのちの契約」	詩編 51編	309, 305, 473, 27

☆3月20日～4月10日の主日礼拝、その他について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮して、3月20日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況が変わり次第、以下と違う対応になる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については、毎週日曜日、第一礼拝（午前9時30分開始）と第二礼拝（午前11時開始）という2回の礼拝を行う形を継続しています。1月30日(日)より2月27日(日)までは、感染拡大の状況を踏まえて、礼拝への出席制限を行ってききましたが、3月6日(日)以降は制限を解除し、どなたでも出席いただけることといたしました。どうぞ、第一礼拝または第二礼拝にご出席ください。ただ、なお感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎主日の第二礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）は続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465）。

なお、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

◎子どもの教会について

幼小科・中高科ともに、1月30日(日)より2月27日(日)まで中止しておりましたが、以下のとおり再開しました。

幼小科については、3月6日(日)より再開しています。午前8時30分より礼拝堂において、礼拝を捧げます。分級は行いません。ただし、3月20日(日)～4月3日(日)は春休みとなります。次回は4月10日(日)となります。

中高科については、3月13日(日)より再開となります。午前9時30分より高井戸教会2階会議室において行います。

◎オンライン祈祷会について

Zoomというアプリを用いてのオンライン祈祷会を、毎月1回（第1日曜日の午後5時より）行っています。

今現在、礼拝のライブ配信ならびに説教動画のメールを毎週受け取っておられる方は、開催日の前日までに案内のメールをお送りしますが、それ以外の方で参加を希望される方は、七條牧師までご連絡ください。また、「オンライン祈祷会」と称していますが、高井戸教会にいらしての参加も可能です。互いに距離を保ち、換気をした部屋で、マスクを着けた形で参加していただきます。準備の関係上、教会にいらっしゃる方は事前に七條牧師までご連絡ください。

「大きな苦難の日にも」（マタイによる福音書 24 章 15～31 節） 牧師 七條真明

マタイによる福音書の第 24 章からの部分には、主イエスがこの世の終わりに関わること、またこの世の終わりの日までに起こる出来事についてお語りになった御言葉が続けて記されています。21 節には、「そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである」と語られます。具体的にはどのような苦難なのか、私たちにははっきりと捉えることができないだけに、不安な思いを沸き立たせることなく聞くことができない主の御言葉であるかもしれません。

しかし、私たちが励まされ、力づけられることは、キリスト教会の歴史を振り返る時、大きな苦難の日々の中でも、教会に生きた人々が、礼拝を捧げ、祈り、信仰の道を歩み続けてきたことです。厳しい苦難の状況の中でも、信仰の戦い、信じるための戦いが、いにしへの教会に生きた人々の中でなされてきたのです。けれども、「信仰の戦い」と聞き、たとえば迫害の苦難の中で、それに耐え、殉教の死さえいとわず信仰に生きた人々のことを思い、私たちは励まされると同時にまた思うのではないのでしょうか。自分は、そのように勇気ある信仰者として生き抜くことができるだろうか、ということです。

しかし、大きな苦難が起こってくるような状況の中で、どのようにせよと主イエスがここでおっしゃっているかということに心を留めたいと思います。「そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい」（16 節）。20 節にも「逃げる」ということに触れられて、苦難の日々の中で、「逃げる」ことの勧めが、主イエスによってなされるのです。危機的な状況にある中で、そこからできるだけ離れるように、逃げるように、そう言われる主イエスの勧めは、私たちには実に当たり前の常識的なことのように思われるところかもしれません。そして、主イエスが「逃げなさい」とおっしゃることと、信仰を貫くということは、どう関わっているのだろうか。逃げるというようなことは、まさに勇ましく信仰の戦いを戦い抜くことをやめて、いわば戦線を離脱するようなことのように思われるからでもあります。

けれども、果たしてそうなのでしょう。主イエスが言われる、苦難の状況の中で「逃げる」ことの勧めと、信仰を貫くことは相矛盾することなのでしょう。そうではないのだと思います。「逃げる」こと。それは、どこへ、何に向かって逃げることなのでしょう。そこで何を見ているということなのでしょう。旧約聖書において、特に詩編などにおいて繰り返されるのは、苦難の状況の中にある詩人が、「主はわたしの避けどころ」と語ることで、苦難の日々の中で、自分の避けどころ、自分がそこでこそ守られる場所として、主なる神御自身を見ているのです。大きな苦難の日々の中でも、主なる神が唯一の避けどころ、自分の逃げ場所、自分が真実に守られる場所であることを見ている。つらくても、悲しくても、涙を流しながらでも、主なる神をそのような御方としてしっかりと見続ける。自分の逃げるべき場所として、目には見えない御方を見続ける。それこそが、信仰の戦い、信じるための戦いでもあるのではないのでしょうか。

それは、言い換えればこういうことなのだと思います。どれほど目の前の苦難が大きくても、その苦難よりも主なる神さまはもっと大きい。はるかに大きな御方である。そのことをしっかりと見て歩むということです。大きな苦難の中で、私たち自身が小さく小さく思えてならない時に、主なる神は、苦難よりもはるかに大きな御方であられることを、神御自身がこの苦難にも打ち勝ってくださる御方であることを、信仰の眼差しをもって見るのです。

主イエスは、苦難の日々の中で、自分の力では不安を拭い去ることができない小さな私たちが、しかしそこでもしっかりと見るべき御方を私たちが見るができるように、ここで御言葉をもって語り掛け、まことの避けどころである、私たちの天の父の御もとを指し示してくださるのです。そして、世の終わりまでの間、どのような大きな苦難があるとしても、一切の苦難の出来事を超えて、その向こうに私たちが見ることになるもの、目にするものを、主イエスは、30 節でお示しくくださいます。「人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る」。「人の子」と御自身のことを語られる主イエス・キリストが、私たちの十字架の救い主、復活され生きておられるまことの救い主が、再び世の終わりに来てくださる。その再臨の主のお姿を、私たちがはっきりと見ることになる。そのことを、主が指し示してくださるのです。

そして、その時、世の終わりには、主の到来と共に、何が起こるか。31 節後半で、「天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」と主イエスご自身がお語りになっています。さまざまな場所、あらゆる場所から人々が主イエスのもとに呼び集められるのだということです。主がここでおっしゃっている世の終わりに起こる出来事は、既に今ここで、教会に生きる私たちのもとで起こり始めている。そう言ってもよいのだと思います。まことの救い主イエス・キリストを知らされ、信じる者たちとして私たちがここに呼び集められている。この高井戸教会においても、主イエスのお語りになっておられることが、今既に起こり始めているのです。